

助け合いのネットワークをつくるにあたり、既存の助け合い活動を生かすにはどうすればよいか

提言

「既存の活動の多様性」は「地域から湧き上がる一人ひとりの生活の多様性」と同じこと。
 地域活動は無理に一つにまとまらなくてもいい。
 互いの活動を尊重する関係があれば
 きっとどこかで自然に化学反応が起きる。
 地域活動同士が尊重し合える社会は、
 まさに個人も互いに尊重し合える
 「共生社会」の姿なのでしょう。

登壇者

【進行役】	岩名 礼介氏	三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) 社会政策部長、主席研究員
	齊藤 秀樹氏	(公財) 全国老人クラブ連合会常務理事
	河田 珪子氏	地域の茶の間創設者/支え合いのしくみづくりアドバイザー
	石橋 正道氏	(社福) 綾瀬市社会福祉協議会
	岡 保正氏	箱の浦自治会まちづくり協議会会長
	佐藤 智彦氏	(社福) 池田町社会福祉協議会事務局長

寄せられた声から

- うわさに聞いていた地域の茶の間のお話が聞いて良かったです。
- 助け合い活動を進めるうえで役に立ちますが、協議体設置のヒントもたくさん頂きました。
- 社会福祉法人もこの分野に本気になるべきと思う！

議事要旨 岩名 礼介氏

「既存の助け合い活動」といえば、体操教室や地域のボランティア活動などをイメージしていた私は、パネルディスカッションで面食らいました。阪南市の箱の浦自治会まちづくり協議会会長の岡さんは「地域の既存の活動(資源)」として「社協」や「地域包括支援センター」「市役所」をさらっと取り上げたのです。岡さんの発想は、まちづくり協議会の活動に強い当事者意識と主体性がなければ出てきません。行政は、地域生活を支える仕組みのごく一部を担っているだけです。介護保険も、行政が支援する通いの場も、いずれも住民の視点からみれば地域生活のごく一部です。行政は、地域活動のすべてを俯瞰できるわけではありません。中心はあくまでも住民です。また岡さんの発言は、地域内の助け合いネットワークが、単に住民グループ間の繋がりだけでなく、どのように行政機関とうまく連携するかも含めて考える必要があることを示唆しています。

さて、地域には多数の団体活動があります。この分科会でも互いの活動を理解し、自分たちの足りないもの、自分たちが提供できることを情報交換する地域のネットワーク活動や場作りが紹介されました。住民の異業種交流の場といえます。これらの取組に共通しているのは、「その場を無理にまとめようとしていない」ことです。多様性の尊重ともいえます。地域づくりでは、行政の想定を超えた活動が生まれることがあります。「行政が考えたものを地域で実行する」のではなく、「地域が

考えたことを行政の用意した場で『ごちゃまぜ』にしてみる」。そのことで新しい化学反応が起こるのだらうと思います。

特に都市部では、住民の価値観や、趣味嗜好も多様なため、地域活動もまた多種多様なものが立ち上がります。こうしたグループの活動はバラバラに見えても、活動グループが相互に補い合ったり、協働することで新たな支援やサービス、あるいは「場」を生み出す可能性があります。こうして、住民の多様性が、活動にも反映され、地域に新たな価値を生み出していくわけです。

人口規模が小さい町では、活動グループの数は限られますが、住民生活の多様性は当然あります。社会福祉協議会や行政、あるいは地縁組織などが、一つ取組を作っては「他にもこんなニーズがある」、「これだけではうまくいかない」と、多層的に地域活動を支援されていることが分科会でも報告されました。小地域であっても、一つの取組ですべての住民ニーズに応えることが難しいことは明らかでしょう。いかに地域の多様性を尊重し、多層的に取り組むかがカギです。

地域活動の多様性は、住民一人ひとりの生活の多様性を反映しています。地域活動は、一つにまとまる必要はありません。互いの活動を尊重する関係性があれば、きっと地域のどこかで「化学反応」が起こるでしょう。住民グループが尊重し合える社会は、個人もまた尊重し合える「共生社会」の姿なのだと思います。

アンケートの結果 参加者概数：260名 回答者数：211名

